

C-9 ニットの縫製に関する研究 第3報 ニット及び裏地の縫合強伸度
実践女大家政 ○平岡和香子 藤井香代 東京学芸大教育 石毛フミ子

目的 ニットの最適縫製条件を求めるため、縫糸、縫目形式の種類を変えて実験した。更に、問題の多い裏地についても、ニット用として市販されているもの3種類を選びその縫合強伸度及び縫縮みについて比較検討した。

方法 試料は毛100%ジャージ、毛30%アクリル70%混紡ジャージ、裏地はキュプラ100%、ポリエステル100%、ナイロン20%キュプラ80%の3種、ミシン糸は絹50番、ポリエステル60番、ウーリーナイロン60番、綿80番、ミシン針は9、11番、試布はタテ、ヨコ、45°バイヤス方向、縫糸の組合せを変えて、本縫、二重環縫(ジャージのみ)の2種のミシンを用いて縫合した。針目は5針/cm、裏地は4~5針/cm、引張試験機はテンシロンを用い、クラブ法によって、縫目に対して直角方向と縫目方向の二面から破断強伸度を測定した。

結果 1) ジャージの縫合破断強伸度は、縫合する布目方向により差はあるが、上糸・下糸共絹糸の場合と上糸に絹糸、下糸にウーリーナイロン糸を用いた場合が良好である。2) 縫合強伸度は、上糸、下糸にウーリーナイロン糸を用いたものが最も大であるが、ウーリーナイロン糸は上糸において糸裂けが生じたため下糸のみしか使用出来なかった。3) 縫目に垂直方向より縫目方向の破断強伸度が小で、特にヨコ布目の縫合が最小である。4) 本縫、二重環縫の縫合強伸度の優劣はみられなかった。5) 裏地は、ポリエステル100%織物をポリエステル60番糸、針目は4~5針/cmで縫合したものが良好である。6) 縫縮みは、縫合直後より24時間後が大きく、裏地、縫糸により差があった。